様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：１７６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５００７０７

研究課題名（和文）ダンスの芸術表現を用いたコミュニケーション能力の育成に資する取組の推進

研究課題名（英文）The promotion of initiatives that contribute to the development of communication skills with artistic expression of dance

研究代表者
高橋　るみ子（TAKAHASHI, Rumiko）

宮崎大学・教育文化学部・准教授

研究者番号：５０１９７１９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、文部科学省の「児童生徒のコミュニケーション能力向上事業」の推進と、今般の「創作ダンス」離れに歯止めをかけることである。この目的を達成するために、「んまつーポス」(研究協力者)と連携・協力し、大学の附属学校を含む12校で、体育に位置付けた実践に取り組んだ。また、それらの成果を、写真集『こどもたちはこうしてコミュニケーション能力を育んだ~芸術家・ゆさぶる・こども~』にまとめた。 さらに、「子供の貧困と芸術教育」から、「浴びるような芸術表現体験」(12 回)を極小規模校で仕組み、リーフレット『こうしてわたしたち鏡洲小15人のコミュニケーション能力は向上した』 にまとめた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to promote the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology's "Project to improve the communication skills of children and students" and to curb recent trends away from "creative dance." To this end, work was carried out on practical positioning in the physical education programs of 12 schools (which include university affiliated schools) with the collaboration and cooperation of "namstrops" (research collaborators). The results were then summarized in a report titled, "Children cultivated communication skills thus: artists, shaking, and children." Additionally, from "child poverty and art education," an "immersive artistic expression experience" was set up (12 times) at very small-scale schools and summarized in a leaflet titled, "This is the way the 15 of us at Kagamizu elementary school improved our communication skills."

研究分野：舞踊教育

キーワード：芸術表現体験　創作ダンス　コミュニケーション能力の向上　芸術家の派遣事業　ワークショップ型の授業　複数の指導者による効果的な授業の在り方　大学の活用　子どもの貧困

1．研究開始当初の背景

本研究は，日本の舞踊教育に根強く存在する問題（後述）が研究動機の発端となっているが，研究着手のきっかけは，芸術家等の雇用促進を図る文部科学省の新事業「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験」（以下，「新事業」という．）の特色―演劇やダンスに特化した事業であること，芸術家と教員が連携して国語，体育，総合的な学習の時間などの授業に効果的に結び付けたワークショップ型の授業を実施すること―である．そこで，体育や保健体育に位置付けたダンスによる取組の推進・普及を図り，その結果として今般の学校現場における「創作ダンス」（小学校は「表現遊び」「表現」．以下，「創作ダンス」という．）離れに歯止めをかけたいと考えた．これが本研究の動機である．

2．研究の目的

芸術家等による実技指導等を内容とする新事業の実施に対し，表現運動及びダンス（以下，「学校ダンス」という．）は，何を求め，どのように対応すべきか．これらを明らかにするために，以下の 3 つの課題を設定し，研究期間内に解決・報告する．

○ 学校及び学校ダンスは，アート NPO 法人や芸術家に何を求め，それらとどのような関係性を構築できるか．
○ 学校ダンスは，教育委員会や学校，そして教員に何を求めるべきであり，そのための手立てをどのように構築すべきか．
○ 初等教育と中等教育を一貫して捉えた学校ダンス（教育方法）の再構築～社会や文化は，学校ダンスに何を求めているのか～．

3．研究の方法

（1）本研究は，3 つの研究目的（前述）を達成するために，研究期間を，当初の 3 年から 4 年に延長し，8 つのプログラム（後述）を計画・実施した．

（2）計画・実施したプログラム

① 新事業の実施．ただし 2 年目からは，原則としてプログラム⑤を受講した教員が所属する学校で実施する．
② 芸術家等の実技披露を収録した映像教材の作成及び活用．
③ 派遣を希望する芸術家等を対象とした勉強会の企画・開催．
④ 学校のニーズと派遣芸術家ができることを効果的・円滑にマッチングさせるためのシステムの構築．
⑤ 教員を対象とした研修会（芸術家等と交渉する力量や，派遣芸術家の実技指導を指導計画に位置付けることができる授業力を培う）の企画・実施．
⑥ MIYAZAKI C-DANCE CENTER（以下，「アート NPO」という．）を中心とした地域（芸術家等・学校・教育委員会・文化ホール，等）の関係づくり
⑦ 教員のためのダンス公演の企画・実施
⑧ リーフレットの作成・配布

※ ①②③⑤⑦は初年度から，④⑥は 2 年目から，⑧は 3 年目から実施．

（3）それぞれのプログラムの活動観察やインタビュー，事後の質問紙による内省調査等から，本研究の成果及び課題を検証・考察し，研究成果を，当該分野と関係する複数の学会，研究会等で発表・報告した．地域に対してはリーフレット（2 種）に加えて写真集を作成し，新事業の推進・普及のために活用した．

4．研究成果

本研究の特色・独創的な点は，芸術家等の雇用促進を目的の一つとする新事業の革新性に注目し，舞踊教育が抱えてきた問題–ダンスは体育か芸術か―を解決しようとした点である．具体的には，学校と芸術家（振付家・ダンサー），NPO 法人等が，学校ダンスの現状を共有し，それぞれの思いや期待を擦り合わせる中で，共にダンスの未来を探ろうとした点である．

本研究の協力校は，パイロット的に取り組んだ平成 23 年度は 2 校，研究初年度の平成 24 年度は 3 校，平成 25 年度は 4 校，平成 26 年度と平成 27 年度はそれぞれ 7 校である（のべ数）．その内訳は，小学校 4 校，中学校 2 校，小中一貫校 2 校，高校 1 校，特別支援学校 2 校であり，中でも特別支援学校が研究協力校に加わったことで，新事業及びダンスの取組が，学校種に関わりなくコミュニケーション能力の育成に効果があることを実証することができた．

（1）研究成果のその一は，プログラム④と⑥である．アート NPO が「企画・運営」し，教科教育の大学教員で構成する「プロジェクト評価委員会」（窓口は，宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター）が「評価」し，宮崎県教育委員会（窓口は学校政策課）が「監督」する新組織を立ち上げた．これにより，アート NPO が発掘・推薦する派遣芸術家等を評価委員会が審査・承認したり，授業アドバイザー（教科専門の大学教員）が複数の指導者によるワークショップ型の授業づくりに参加し，その成果を評価委員会に報告したり，教育フォーラムを通して外部評価を受けたり等が可能となった．

さらに，新組織及びその機能が文部科学省に評価され，アート NPO が新事業のコーディネート委託団体に採択となった（平成 25・26・27 年度）．それにより，先進的な授業研究に取り組む大学の附属学校（中央と地方）における比較研究が可能となり，その成果をまとめた写真集『こどもたちはこうしてコミュニケーション能力を育んだ～芸術家・ゆさぶる・こども～』を作成することができた．

（2）研究成果のその二は，プログラム⑤と⑦である．宮崎県教育委員会等と連携・協

力し，「平成 27 年度体育・保健体育指導者講習会（ダンス）」において，研究協力者の芸術家（んまつーポス）が講師となり，ワークショップ型の授業を紹介した．同じく宮崎大学教員免許状更新講習（平成 25 年度～）において，同様のワークショップ型の授業を紹介し，新事業とその成果について現職教員への周知を図った．その結果，これまでは芸術教科や総合的な学習の時間に位置付けて実施していた文化庁の「芸術家派遣事業」を，体育（ダンス）で実施する学校が増えた．例えば，平成 26 年度は 31 校（全実施校の 79%），平成 27 年度は 22 校（全実施校の 61%）が，コンテンポラリー・ダンスを選択した．

さらに，より新事業の推進・普及を図るために，「創作ダンス」の授業における複数の指導者（担当教員と派遣芸術家）による指導の効果を調査した（平成 26 年度文部科学省企画公募事業「学校体育活動における指導のあり方調査研究」）．そして，複数の指導者によるダンスの授業は，複数回実施することで，子供たちへの指導の効果が高まることや，1 回の授業であっても，担当教員と芸術家等との事前打ち合わせの実施や，対象となる児童生徒の人数を制限する（例えば，50 人以下．）などの実施条件を整えることで，指導の効果を高めることができる等，これまで漠然としていた外部指導者（専門家）との協働のあり方について，一つの指標を示すことができた．

（3）研究成果のその三は，演劇や大衆芸能の取組と同様に，ダンスの取組も，子供たちのコミュニケーション能力の育成に資することを示せたことである．

新事業の演劇や大衆芸能による取組の効果については，コミュニケーション教育推進会議が，実践校からの報告を整理し，「受け入れる力」の向上，「伝える力」の向上，自己肯定感と自信の醸成，学習環境の改善の 4 つを報告しているが，本研究も，ダンスの実践校からの報告を整理し，ダンスでも同様の効果があることを写真と映像で示した．

例えば，「受け入れる力」の向上は，追体験したり，共感したり，違いを楽しんだり，自分について考えたり，共に課題を解決したりする子供たちの様子や表情を写真等に残すことができた．また，振付家が，対面によるコミュニケーションを通して，いろいろな価値に気づかせたり，発案を誘引したりしている様子も，写真と映像で示すことができた．

写真提供：宮崎大学教育文化学部附属中学校

「伝える力」の向上は，友達の立場を尊重したり，グループ単位で協働したり，自分から働きかけたりする子供たちの様子や表情を写真等に残すことができた．また，「んまつーポス」が，子供たちがうまく伝えたいと思うように，情報の共有を図ったり潜在的な能力を引き出したりする様子も，映像に残すことができた．

写真提供：宮崎大学教育文化学部附属小学校

自己肯定感と自信の醸成は，「んまつーポス」が，子供たちの自信を引き出したり，学習意欲を引き出したり，居場所を用意した結果―子供たちの普段は見ることのない一面，教員が見いだしにくい子供の優れた面やよい面―として，写真等に残すことができた．

写真提供：宮崎大学教育文化学部附属小学校

学習環境の改善は，学習意欲の高まりや，学び合う集団の様子，言語活動が充実したり言語活動が活性化したりする様子を，写真と映像に残すことができた．

写真提供：宮崎大学教育文化学部附属小学校

（4）研究成果の総括

ダンスで新事業の普及を図るということは社会や文化の要請に応えるということであり，それは，これまでは体育の学習内容であり目的であった学校ダンスが，コミュニケーション能力の育成に資する手段になることを推進することである．しかし，敢えて手段であることを受け入れることで，ダンスを体育で取り扱う意味―体育科の領域であり続けながら，音楽や図工・美術と共に芸術教育の一翼を担う―が明確となり，逆に創作ダンスや鑑賞学習に興味・関心を示す学校や教員が増加した．また，学校ダンスが取り扱う内容についても，芸術教科にある「鑑賞」が加わり，それが当然の成り行きとして受け入れられるようになった．

さらに，ダンスで新事業の普及を図るということは，作品を創り上げるダンスや振付家・ダンサーが子供たちの身近な存在になったり，それが将来の観客層の育成＝ダンスの未来につながったり等，ダンスにとっても意味のある事業であることが示唆された．

（5）最後に，子供たちの自由記述の中から，ダンスによる取組ならではと言える感想（抜粋）を示す．

① 4時間目に，んまつーポスの人たちがダンスをたくさん踊りました．しかもかかえこみジャンプを体育館でふつうにかかとをつけてやっていたので，「やばっ！」「すごっ！」と思いました．ぼくは，たいそうをやめて，テニスを習い始めました．（小4男子）
② 今日は，きのう創ったダンスを撮影しました．まず，場所を決めました・・・撮影では3回ぐらいみんなで踊るところがあるので，けっこうあわただしかったです．とても暑くて，つかれたけれども，いそがしいってなんか楽しいなあと思いました．（小4女子）
③ 自分で考えて行動することで，こうして記憶にも残っています．（中3男子）
④ ダンスを芸術として捉えることは私には初めての体験でした．（中3女子）
⑤ 私のかたい頭をやわらかくしてくれました．（中3女子）
⑥ 見たり，動いたり，相談したりしながら進んでいく授業は，私の中では新しい授業というイメージでした.（中3女子）
⑦ 今回は感想ではなく価値を決めろ（批評）と言われたので，悩んだ部分がかなりあります．（中3男子）

＜引用文献＞

① 文部科学省，コミュニケーション教育推進会議審議経過報告，子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～「話し合う・創る・表現する」ワークショップへの取組～，平成23年8月29日，8-10

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計7件）

① 高橋 るみ子，豊福 彬文，野邊 麻衣子，石本 愛，野邊 壮平，コミュニケーション能力の向上を目的としたダンス教材の開発，宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター研究紀要，査読無，24号，2016,21-36
② 高橋 るみ子，野邊 麻衣子，豊福 彬文，石本 愛，他7名，学校体育活動（ダンス）における複数の指導者による効果的な指導のあり方調査研究（中間報告），宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター研究紀要，査読無，23号，2015，91-105
③ 高橋 るみ子，豊福 彬文，若手芸術家と教員養成系大学等連携・協力，舞踊学，査読無，第37号，2015，67
④ 高橋 るみ子，ワークショップ型で輝くダンスの授業，体育科教育，第62巻第1号，2014，40-43
⑤ 高橋 るみ子，豊福 彬文，矢吹 修一，公共文化施設と教員養成大学等との新たな関係づくり～大学の専門的な教育力を効果的に導入したダンス・アウトリーチ，宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター研究紀要，査読無，22号，2014，101-115
⑥ 高橋 るみ子，児玉 孝文，豊福 彬文，アーティストが進化・深化させる創作ダンスの学習，舞踊学，査読無，第36巻，2014，92
⑦ 高橋 るみ子，豊福 彬文，野邊 壮平，他4名，小中一貫教育支援：コミュニケーション能力の向上を目的としたダンス学習の成果と課題～宮崎大学教育文化学部附属学校の取組，宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター研究紀要，査読無，21号，2013，141-157

〔学会発表〕（計3件）

① 高橋 るみ子，野邊 壮平，表現運動・ダンスによる複数の指導者（外部指導者を含む）による効果的な指導のあり方，第67回舞踊学会大会，福島大学（福島県・福島市），2015,12,05～06，
② 高橋 るみ子，児玉 孝文，劇場と大学（教員養成学部）との新たな関係づくり～いわき芸術文化交流館アリオスと宮崎大学の実践～，第65回舞踊学会大会，愛知芸術文化センター（愛知県・名古屋市），2013,12,08
③ 児玉 孝文，高橋 るみ子，豊福 彬文，アーティストが進化/深化させる創作ダンスの学習，第64回舞踊学会大会，東京大学（東京都・文京区），2012,12,02

〔図書〕（計1件）

① 宮本 乙女，中村 恭子，中村 なおみ，高橋 るみ子，大修館書店，みんなでト

ライ！表現運動の授業，2015,88-91

〔その他〕
ホームページ等
http://npomcdc.wix.com/mcdc#!untitled/c1cil

6. 研究組織
（1） 研究代表者
高橋 るみ子（TAKAHASHI,Rumiko）
宮崎大学・教育文化学部・准教授
研究者番号：50197191
（2） 省略
（3） 省略
（4） 研究協力者
豊福 彬文（TOYOFUKU,Akifumi）
野邊 壮平（NOBE,Souhei）
児玉 孝文（KODAMA,Takafumi）